

新古今時代歌人の上代意識

塚 本 邦 雄

一 序

一九九二年の秋、名古屋在住の青年詩人森川龍志氏から詩集『バルカロオレ』の寄贈を受けた。その船歌が仁徳朝の高名な歌謡を本歌としてゐるのは、緋いて二、三分後にわかつた。私の最愛の古事記歌謡である。すなはち「枯野を塩に焼き 其が余り琴に作り 搔き引くや 由良の戸の海石に 振れ立つ漬の木のさやさや」が詩集の主題であった。思へばこの、もとは大御水運送船たる「枯野」丸の原木は、おほよそ近畿大学に遠からぬ所に聳えてゐたのであるまいか。朝日が当ると淡路島に影が及び夕日は「高安山」といふくだりに、その場所が想定し得る。近鉄「俊徳道」のその俊徳丸の父は高安の長者であり、高安山は東南七、八軒にある。

森川龍志作「枯野といふ名の飛行機」は次の通りである。「かつて軽野を飛び越した飛行機／廃材となつて楽器になつた／僕の枯野は何を奏でよう／バルカロオレ／枯野といふ名の飛行機は／其のまま風の旋律となつて／貴女のバルカロオレを／明滅させ瞑目させるだろう／かつて軽野を飛び越えた僕の／飛行機よ／再び黄泉より還れ／貴女の腕の温もりは／他の人には矢張り見つからなかつた／枯野よ軽野／貴女は何時からか／穹窿を漕ぎ急ぐ枯野を駆つて／僕の心底を揺らすやうになつた／そして何時迄かさ迷ふ荒ら野の果てに／行き着けない遠くの丘の上に／佇む一条の宇星であつた／枯野といふ名の飛行機よ／かつて軽野を飛び越したやうに／虚空を一筋に切り裂いて／蠱惑のうちに舞ひ降りよ」。なほ、サブタイトルとして、古事記歌謡を引いてゐる。

近代・現代の短歌における上代文学の浸透度も、殊に「アララギ」系歌人の、特に万葉集研究は聞えてをり、夙に斎藤茂吉・土屋文明の業績はかなりの評価を得ていた。茂吉はみづからの短歌作品への栄養素としたのみならず、人麿研究、なかんづくその終焉の地を石見の國のある地点と論証することにすさまじいまでの情熱を傾けて実地踏破をも敢へて試みた。もつともその成果に関しては必ずしも大方の賛同を得るには至らなかつた。

・ うつそみは常なけれども山川に映ゆる紅葉をうれしみにけり
『赤光』

・ もみぢ葉の過ぎしを思ひ繁き世に觸りつるなべに悲しみにけり
同

・ むらぎものみだれしづまらず峽ふかくひとりこもれど
峽の音かなし
『あらたま』

・ この深き峽間の底にさにづらふ紅葉ちりつつ時ゆきぬらむ
同

万葉集と出会った時のときめきが響いてくるやうな作の前二首は、初版本逆年順『赤光』の巻末「塩原行」中の代表作、すなはち茂吉の最若書であり、万葉枕詞が枕の域から現実の紅葉に還元されてゐるのが注目され、後の二首は第二歌集の巻末に近く箱根山荘における詠。ちなみに前は三十二歳、後は三十六歳時の作であつた。

明治歌人の主として万葉讃仰振りは枚挙に遑がない。記紀・神楽歌・催馬楽・東遊歌等の歌謡を愛し、これに倣つた例には乏しいが、万葉への傾斜傾向は著しい。日本人のバックボーンであることを、より深刻に体得してゐる例證でもあるが、国粹主義、ミリタリズムの高揚鼓吹される時代に、万葉が一段とクローズアップされる例は、太平洋戦争中に、万葉の極く一部分、それも巻第二十の防人の歌、なかんづく火長今奉部与曾布の「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは」他数首を、称名念仏さながらに称へさせられた記憶は、今日生き残りの戦中派の万葉観に深刻な痕を残してゐる。

茂吉の約三十年々長、天田愚庵は必ずしも頗る高名ではなく、数奇を極めた生涯の方が喧伝されてゐるが、私見によれば、その奔放な歌風は端倪を許さず、特異な修辭に心を尽してゐる。左の創作万葉仮名に見る才気もただものならず、酔狂などと笑殺すべきではあるまい。

・ 羽雁鳴物戸波家門琴菜櫛咲串耳勿飲馬鮭遠夢（ハカリナキモノトハイヘドコトナクシエクシニノムナウマザケヲユメ）

・ 酔杉葉婦也投嚙木綿呉爾古農人壺乎蚤莫越夢（エヒスギバツマヤナゲカムユフグレニコノヒトツボヲノミコスヌメ）

二 六百番歌合と顕昭陳狀

建久四年（一一九四）秋のこの歌合は藤原良経（二十四歳）の主催。左方には良経と定家（三十一歳）、有家（三十八歳）に問題の顕昭（六十代前半）が連なり、右方に家隆（三十五歳）慈円（三十八歳）寂蓮（五十代前半）が参加してゐる。他には、左の季経・兼宗、右の家房・経家・隆信らで、新古今集入撰も三首以下の、名ばかりの歌人である。ちなみに論歌顕昭も亦入撰二首。

慈円九十二首・良経七十九首・俊成七十二首・定家四十六首・家隆四十三首・寂蓮三十五首、有家でも十九首の入撰であるから、この面だけ比べても六条家の季経一首、経家二首、前記顕昭二首を考へるなら、世はもはや俊成・定家・家隆・寂蓮らの御子左家と、彼ら六条家との覇を争ふやうな形勢ではなかつた。

判者は七十九歳の御子左家の棟梁にして宮廷歌界の重鎮俊成。息子定家は二十四歳の二見浦百首に代表作中の代表作「見渡せば花もみぢもなかりけり」を見せ、その駿足振りは聞えてゐたし、家隆もこれに伍して生涯の花の時代を迎へつつあつた。だが詩帝後鳥羽は未だ十四歳、奸雄久我通親が政変を企てる予兆をはらみ、六条家も失地回復を狙ふ氣運にあつた。

十三番 枯野 左勝 女房
見し秋を何に残さむ草の原一つに変わる野辺の気色に

右 隆信

霜枯の野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ

右方申云、「草の原」聞きよからず。左方申云、右歌ふるめかし。

判云、左「何に残さむ草の原」と言へる、艶にこそ侍るめれ。右方、「草の原」難じ申之条、頗るうたたあることとにや。紫式部、歌詠みのほどよりも物書く筆は殊勝の上、花宴の巻は殊に優あるものなり。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也。右、心詞悪しくは見えざるにや。但常の体なるべし。右歌宜し。勝と申すべし。

まことに含みの多い難解判詞の一例と言へよう。折角の右方人の陳難も、判者の論断もどこかですれ違つて、今日残つてゐるのは「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」なる「箴言」のみ。これが独り歩きして先蹤文学もしくは芸術全般を究めることが詩歌人乃至芸術家一般の要諦であること、このように煎じつめられた。

その結果論に誤謬は無い。だが十二世紀末の詩歌界では、尚古派の六条家は万葉にもっぱら典拠し、聖性を認め、敢へて革新派御子右家を源氏礼讃に傾くと思ひこんでゐた形跡がある。六条家も源氏を含む諸物語に学んでゐないはず

はない。御子左家が万葉音痴であるはずも決してない。それは十分承知の上で、俊成はいささか極論めいた断言を敢へてしたのだらう。

六条家の多分経家あたりの発言と思はれる「草の原聞きよからず（一本に聞きかつず）は、源氏未見のための論難ではなく、読みこんでゐるための諷諫に近い批判であるまいか。すなわち「花宴」の巻で、朧月夜の答歌に用ゐられた「草の原」は墓原を意味する。晴儀、左大将家の歌合において、その父前関白兼実も必ず見るはずの歌合には、先づ遠慮して然るべき準制詞だと言ひたかつたのだらう。そしてその底意も俊成は一瞬に感得したと思はれる。俊成の読みは深く、屈折してゐる。歌合における諤々の論難・判詞・反駁では、卒然と通読すれば顕昭を矢面に、六条家の面々は眨され放しに見える。

ところが歌合終了時に勝負を通算すれば、季経・有家・顕昭・経家の六条家対定家・家隆・隆信・寂蓮の御子左家の成績は、負が前者一六五、後者一六四、持は一二五対一二二、勝一一〇対一一四と、御子右家にほんの少々の優位が認められるだけといふ、驚くべき加減、配慮を見せてゐる。歌合進行中ではこの趨勢は把握不能ゆゑに、顕昭の時としては失笑を禁じ得ぬ執拗で見当外れの陳難も、感情的な被虐感の爆発とも思はれかねない。

春 元日宴 左

むつき立つ今日のまどぬやもしきの豊の明りの初めなるらむ 顕昭

右方申云 「むつき立つ」聞き慣れず覚ゆ。

左方陳云 此の五文字、万葉集より出でたり。

右方申云 「豊の明り」おぼつかなし

左方陳云 諸の節会を豊の明りと申す由、宣命に見えたり。

判云 左歌、「むつき立つ」と置けるは、右方殊に咎め申すべしとも覚え侍らず。万葉集にもまことに「むつき立つ」など詠めるやうに覚え侍り。但万葉集より出でたりとも、歌合の時は左右無き証拠とすべしとも覚え侍らず。彼の集には聞きにくき事共有りぬべし。「山田朝臣の鼻の上を掘れ」とも云ひ、「酒飲みて酔ひ泣きするに豈しかめや」と申すなどは、取り出でがたかるべし。されば、優なる事を取るべきなりとぞ、故人申し侍りし。

顕昭陳状

梅花の歌

大弑紀卿

むつき立ち春の来らばかくしこそ梅をかざして樂しきを積み

久米朝臣広繩の宴に

大伴家持

むつき立つ春の初めにかくしつづつ相し笑みては時じ
けめやも

今案ずるに、此の「むつき立つ」の詞、剛く恐ろしか
るべきにあらず。春宴に尤も引用すべく侍る歟。「鼻の
上を」と云ひ「酔ひ泣きす」などと云へる言葉に校ふ
可きにあらず。又、万葉の歌は、大神朝臣陸奥守奥守
の報へ嗤へる池田朝臣が歌云はく、

仏造る朱丹足らずは水たまる池田朝臣が鼻の上を掘
れ

然るに今の判詞に云はく、「山田朝臣が」と書かれ侍
り。相違万葉集に侍る、如何。

博引傍証を以て聞える顕昭に 歌合劈頭の元日の宴から
まづ頂門の一針をと、俊成はかなり意識したのであらう。

万葉は六条家のみの範ならず、御子左家も篤と承知し、大
いに学んでゐると宣言しておく積りであつたと考へられる
ところがこれは完全に俊成のミスである。まづ、顕昭の作
は、決して「優なる事を取るべきでなり」といふ「故人」
の訓へに背いてはゐない。「むつき」の証歌は二首共に、め
でたく優であると言へよう。俊成は記憶が混乱してゐたか、
顕昭の本歌なら、恐らく型破りの奇歌と決めてかかつてゐ
たかである。山田・池田の作者名錯誤に至つては一言もあ
るまい。醜態である。

恋七 寄海恋 左

鯨取るかしこき海のそこまでも君だに住まば浪路しのが
ん 顕昭

右方申云 左歌、恐しくや。

判之 左、鯨取るらんこそ、万葉集にぞあるやうに覚
え侍れど、左様の狂歌体の歌共多く侍る中に侍るにや。
然れども、いと恐しく聞ゆ。秦皇の蓬壺を尋ねしも、
ただ大魚を「射よ」などと仰せしかども、「取れ」とま
では聞かざりき。おほよそ、歌は優艶ならんことをこ
そ庶幾すべきを、ことさらに人を恐れしむること、道
の為身の為其の要無きか。

顕昭陳申して云。「鯨取るかしこの海」と仕れる、更
に人を威さん料とも存じ侍らず。万葉集の狂歌・戯吟
の中にも侍らず。彼の長歌の中に「鯨取る淡の海」と
云ふ歌につけて詠み侍る也。鯨鯢は恐しくや侍らん。
歌にあながち怖づくべくも侍らず。「虎に乗る」とも詠
み。「龍取りて来ん」と詠めるも、さる様の歌は、さて
こそは侍るめれ。但し、「秦皇の大魚を「射よ」と仰せ
しも『取れ』とは聞えざりき」と侍るぞ怪しく聞え侍
る。和歌は万葉を本体と侍るに彼の集に鯨取ると詠み
て侍れば、三史文撰に鯨取る証文の侍らざらんは、和
歌の大事に侍らず。

この「鯨取る」に關しても、滔々とまくし立てる顯昭の弁に七分の理はあるやうに見える。理論的に本筋は過つてゐない。だが彼自身の作品そのものに即すると、恋歌としての「優艶」性にはいちじるしく欠け、何ゆゑに選りに選つて恋歌に鯨を拉しざるかが、全く説得力を持たない。題は「寄海恋」である。本歌の質は問ふまい。作者は奇を衒つたとしか思はぬのも自然だらう。だが、しかし顯昭の胸中也察し得る。

・鯨魚取り 淡海の海を 沖^まきけて 漕ぎ来る船 辺附きて 漕ぎ来る船 沖つ櫂 いたくな撥ねそ 辺つ櫂 いたくな撥ねそ 若草の夫の 思ふ鳥立つ

・鯨魚取り 浜辺を漬み うちなびき 生ふる玉藻に朝風に 千重波寄せ 夕風に 五百重波寄す 辺つ波の いやしくしくに 月にけた 日に日に見とも今のみに 飽き足らめやも 白波の い聞きめぐれる 住吉の浜

・鯨魚取り海や死にする山や死にする 死ぬれこそ海は 潮干て山は枯れすれ

俊成の指すのは恐らく「池田の朝臣」と同類の卷第十六の「海や死にする」であつたと思はれる。顯昭は俊成に「更に人を威さん料とも存じ侍らず」などと弁じてゐるに、大后の御歌の「若草の夫」を示すべきであつた。

一方は考証が行き届かず、一方は陳弁方法に手ぬかりが

ある。俊成は一方的に思ひこみがあり、その独断の冴えが奏効する時もあれば、見当違ひに終ることもある。畢竟は本人の作の質の問題であり、用語を万葉に求めようと源氏に探らうと自由だし、二者択一を迫ることではない。たとへば左大将良経が詠んだら、胸を刺す悲恋の趣を伝へ得たらう。万葉に典拠すればすべて良し、と言はぬばかりの顯昭の信仰に近い信条が、滑稽を通り越してあはれに見えるのはこのやうな時である。

それにしても「左様の狂歌体の歌共多く侍る中に侍るにや」は不勉強の譏りを免れまい。俊成はこの発言によつて、卷十六歌しか知らなかつたことを露呈してゐる。

その上「鯨取る」といふ枕詞風の第一句を、勝手に命令形に變へて、ついでに蓬萊へ不老不死の薬を探しに行つた方士徐市の故事に話を飛躍させ、ひたすら顯昭の作を俗で粗野であると独断し律し去らうとするのは、理不尽としか思へない。

「彼の集に『鯨取る』と詠みて侍れば、三史文撰に鯨取る証文の侍らざらんは、和歌の大事に侍らず」なる顯昭の啖呵、よく言つたと喝采を誘はれる。だが、この啖呵も論点がずれてゐるし、俊成にはこたへまい。齒痒いのは、顯昭が卷第二の哀艶な大后御歌を、これ視よと俊成に示さなかつたことだ。

春下
蛙かたが
歎なげ冬の艶なまふ井手をばよそにしてかひやが下も蛙かたが鳴くな

り

頭昭

右方申云。「かひやが下」春詠まれたる如何。「朝霞かひやが下に鳴く蛙」と云ふ本歌は、万葉集の秋部にこそ入りたれ。「朝霞」と置けるは、春に限らず。秋も霞詠める事、万葉にも多く見ゆる歎。

陳云。蛙の題古き撰集にも歌合にも、近き世も皆、春の題に詠める也。「かひやが下に蛙」と詠めるに就きて、蛙の題にかひや詠まん、何様難有る哉。

又難云。蛙を春詠まん事は沙汰に及ばず。猶かひやを春詠まん事を疑ひ申す也。

又陳云。かひやと云ふ事、様々の義あり。其の中に田舎に蚕飼ふ屋を飼屋と云ふ。其の下に蛙、蚕を食はん為多く集まるなり、土民も「是を飼屋と言ふふなり」と申しき。其の義は春に違ふべからざるに。

又難云。此の義ならば蚕を飼ふ事は四月よりの事なり。然れば猶春には不審の事也。

又陳云。飼屋は造りつれば何事もさて置きたる物なれば、春も夏も蛙其の下に鳴きてん。蚕を飼ふ事、又三月にも皆する事也。然れば相違有るべからず。

判云。左歌、鹿火屋が下に蛙鳴く事は、打ち任せた

る事を、「かひやが下も」と云へる「も」の字、事新しく聞ゆ。又、かひやも春詠めらんやなど、これらをだにおぼつかなく承る程に、此の左右の間答の状こそ、已に勿論の事と見え侍れ。まづ「かひやが下」の歌は、万葉集に二首侍るをこそ、指南とはすべき事にて侍れ。其の歌、一首は「朝霞鹿火屋が下に鳴く蛙声だに聞かばわれ恋ひめやも」、是第十巻秋の歌の中也。今一首は「朝霞鹿火屋が下に鳴く蛙忍びつつありと告げん子もがも」、同じく第十六巻の中なり。是等の歌の心は、山田の庵に田を守る子等、本の住宅を離居して、山中に居しむるの間、蛙の声を聞きて別居の慰めとせる心、相聞歌也。

これを単純な澄むと濁る間違ひと言へるのは清濁判然たる現代人の錯覚だろうか。万葉の本歌は「鹿火屋かひや」であり、収穫期の山岳丘陵部の田畑を、鹿や猪の害から守るための番小屋を、頭昭は「飼屋」すなはち蚕飼こがひのための小舎と解してゐるところから、意見の齟齬は始まる。

晩秋の題として周知であつたはずの「鹿火屋」を、頭昭はまこと養蚕用の小屋と考へてゐたのだらうか。確に現代の歳時記にも「飼屋」は春の季題として登載されてゐる。一読、過つて用ゐた用語を自説に即応させようと強弁してゐるやうに見えるが、それでも難陳はある。

蚤飼は四月からで、すなはち春下の題の蛙には不適當だといふ。春蚤・夏蚤・秋蚤の別があつて、標準は夏であつたのなら、難陳の「春には不審の事」も頷けるが、万葉の本歌があくまでも「鹿火屋」である以上、顕昭の陳状は強弁の譏りを甘受せねばなるまい。

ちなみに、「寄海恋」の右は寂蓮の「石見瀧千尋の底もたとふれば浅き瀬になる身の恨みかな」、「蛙」の方は慈円の「まだ取らぬ早苗の葉末なびくなりすだく蛙のこゑのひびきに」で、いづれも左、顕昭の負であつた。僻目かも知れないが、顕昭の作は一首一首、まづ異を称へるために、意表を衝くやうな取材を考へてゐるやうに思はれる。次には陳難を誘ふべき用語を一首のどこかにしつらへ、俊成の判の不備を待ち構へてゐる形跡も無くはない。ただ、万葉へのひたすらな帰依は、ほとほと感歎服したい。残念なのは、その聖なる原典も、彼の作品そのものには、必ずしも有効ではなかつたことだ。

定家ら前衛的歌人の作品にも、万葉本歌取りは少くはない。「別恋」には「かはれただ別る道の野辺の露命にむかふものも思はじ」など、万葉集卷第十二の「まさかがみただ目に君を見てばこそいのちにむかふわが恋ひめやも」のさりげない本歌取りであるが、たとへば顕昭の作にはまづ見られない鮮明な歌ひ口を称へたい。

三 水無瀬恋十五首歌合と伊勢物語

後鳥羽院が二十一歳、建仁二年（一一〇二）九月十三日夜にこの歌合を主催する時の軒昂たる意気は想像に余るものあり。院は前年史上最大の歌合を企て、以後三箇年を費してこの盛儀を全うするが、詩歌の帝の特権で、愛寵の女房歌人、今を時めく歌人を持駒に、栄耀を尽してゐる。しかもこの建仁元年にはみづからの百首を筆頭におき、歌壇の真に実力ある壮年歌人に百首歌を競はせてゐる。二十歳の帝の百首歌の「恋」に、「白菊に人の心ぞ知られけるうつろひにけり霜もおきあへず」なる一首があるのを見た時、私は慄然としたことがある。

六百番歌合は一番残らず味読してゐたことだらう。百首歌はおほよそが千載集を下限としての技法を出てゐないと見られてゐるが、この「白菊」は明らかに俊成風の美学をはみ出してゐる。千五百番歌合進行中に院は、そこから更に自分好みの歌人を選出して、所も水無瀬離宮で、この七十五番百五十首の歌合を営んだ。

召された者、良経・慈円・定家・家隆・雅経・公継・有家・俊成女・宮内卿の九名、判者は俊成。千五百番の精神の感あり、世は九条家・御子左家のものとなつてゐたこと、一目瞭然である。

決して万葉尊崇の志が衰へたわけではないが、この十三世紀初頭、宮廷歌人のまづ食指を伸ばすものに伊勢物語があつたことは疑へない。「源氏見ざる歌詠みは」の六百番歌合から十年を経て、その源氏に多大の影響を与へた伊勢物語を志向するのは自然の成りゆきであつた。「詠歌大概」において、定家はこの書を、古典の中では殊に学ぶべきものと力説してゐる。

青春の入口、怖いもの知らずの帝王は側近の文人らに次々と詞華を勧められ、旺盛な知識欲でこれらを貪り、わが血肉と化して行つた。

院が九条家・御子左家系列を範とする限り、万葉は尊重しつつ第二とするのは自然の趨勢と思はれる。結論として後鳥羽院歌壇は古典に関しては佳きものはすべてこれを珍重する主義であつた。

春恋

左 鶯のこほれるなみだとけぬれでなほわが袖はむすばほれつつ
左大臣

右 おもかげのかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に
俊成女

判 左は雪のうちに春は来にけり鶯のといへる歌を取り

り。左、なほわが袖はむすばほれつつといへる姿殊によるしく見え侍れば、以左為勝。

良経の作は本歌合の冒頭に位する。本歌は言ふまでもなく古今集の巻頭から四首目、二条后すなはち藤原高子のただ一首の入撰歌であり、絶唱であつた。判詞にある通り「雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」である。陽成院母后、在原業平との仲を兄基経の政策によつて割かれ、清和帝の後宮に入ること、その後平生の悲劇は、伊勢物語の書かれざる背後の物語としてわれわれの脳裏にある。

それにしても左方の作はなまぬるい。彼ほどの天才がと首をかしげたくなるやうな凡歌と言ふ他はない。二条后高子の肺腑を抉るかの、鋭利無双の調べと比べれば、撰閲家の天才の名が泣く。ともあれ、貴顕主催の歌合の左一番が冴えないのは常のこと、千五百番歌合の冒頭の「春来れば変らぬ空ぞ変りゆく」もこの例に洩れぬ。

それに比べて俊成女の「面影のかすめる月」は水際立つてゐる。彼女の生涯の代表作としてよからう。また、この「水無瀬恋十五首歌合」百五十首中の白眉であり、更には、新古今集の、この時代を家徴する技法を説く時も、決して逸することのできぬ秀歌と言はう。極論するなら、後鳥羽院のめがねにかなつたこの女房の、この一首を得ただけでも、この歌合を催した甲斐はあつた。伊勢物語本歌取中でも、最高作に擬したい。

藤原高子との悲恋を歌つた業平歌は、この作の本歌、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」に始まつて、カタストロフは「白珠か何ぞと人の問ひし時」であらう。この後者が新古今集の哀傷に選ばれてゐるのもゆかしい。

人を恋ふるゆゑの涙は袖の上に珠をなす。その珠のおもてに月は宿る。さらに、その月輪の上には、恋ふる人の面影がおぼろに映つてゐる。重層的幻想詠とでも言ふべき、新古今集時代独特の超絶技巧の一典型である。

歌合が、たとへ詩帝後鳥羽院の主催であつても、俊成が凡作に勝を宣し、秀作を負とせねばならぬこの儀礼のおろかしさを、現代人は諒解しつつ苦笑する。多々ある例ではあるが、これほど極端なものも少からう。また、俊成判には六百番歌合にも、かつ御裳濯河歌合にも、首を傾げざるを得ぬ奇妙な判詞もしくは判があり、すべてを名判とするのは過褒と言はざるを得ない。

閑話休題、この歌合が左右共に伊勢物語及びこれに関連する人物の作を本歌とする作で始まるのは、決して偶然ではあるまい。定歌の持論はまだ後鳥羽院の詩法を左右するほどの時期ではないが、万葉集一辺倒的傾向のあつた六条家の頽勢により、自然、伊勢物語・源氏物語の線に思考が導かれつつあつたと見ても差支へあるまい。「万葉みざる歌詠みは」の一喝を顕昭は吐けなかつた。

羈中恋

左 武蔵野やひとり思ひにむせぶかなきつつなれにに
し妻もこもらで 有家

右 草枕むすびさだめんかた知らずならぬ野辺の夢
のかよひ路 雅経

判 左は武蔵野やといひ、妻もこもらでなど言へるは、今日はな焼きそと言へる歌の心なるべしと見え侍り。右はまた、習はぬ野辺の夢の通ひ路といへる、優に見え侍るを、左、ひとり思ひにむせぶかな、少しいかにぞや聞きわかれず侍りしにや、右の勝の由申し侍りにしなるべし。

左歌、俊成は判詞に触れてゐないが、「武蔵野は今日はな焼きそ」の挿話に重ねて、下句には明らかに八橋の「かきつばた」折句歌一首とその場面も写されてゐると見るのが至当と考へる。かなりの趣向の伊勢物語ものと言へる。雅経の本歌は古今集の「宵々に枕さだめむ方もなしいかに見し夜か夢に見えけむ」ではあらうが、比較を絶した秀歌に変身を遂げてゐる。

むしろ左の「かきつばた」から、その終章の「都鳥」の間の、男の旅枕を連想させて趣は一段と深い。七世紀の後、玄原道造はこの一首をサブタイトルとして、傑れた短篇「鮎子」を生んだ。

四 跋

言語美の究極を探るべく、代々の詩歌人は切磋琢磨を重ねて来た。殊に和歌は万葉以来の、伝統の血を濃く重く享けてゐる詩型ゆゑに、さまざまの革新運動を経つつも、つひに三十一音律以外の何ものにもあらずの眞理を体得したかに見える。だが、その音律くらゐ複雑にして不可解なものはあるまい。五七五七七の五句にせよ、千変万化する。その例は、たとへば万葉集全二十巻には、二十世紀末の、あらゆる新風短歌の原型がすべて揃つてゐる。いかなる新奇な試行も、その源は万葉集のどこかにひそんでゐる。畏るべき詞華の母胎そのものである。

芭蕉も亦、万葉に学んでゐる。表向きはひたすらに西行への帰依、円位上人のまねびを説いてはゐるが、彼もぬからず所要所は万葉的楔を打ちこんでゐる。

・保美村より伊良古崎へ壱里ばかりもあるべし。三河の国の地つゞきにて、伊勢とは海へだてたるところなれど、いかなる故にか万葉集には伊勢の名所のうちに撰び入れたら

「笈の小文」

確に、芭蕉の言ふ通り巻第一該当歌の詞書に「麻統王の伊勢の伊良虞の島に流さるる時、人、哀しび傷みて作れる歌」とある。ここは現在愛知県渥美郡属する。

また、別に「潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を」の詞書にも「伊勢国に幸しし時に、京に留まれる柿本朝臣人麿の作れる歌」なる文言が見える。「続猿蓑」の「旅人のころにも似よ椎の華」は巻第二四有島皇子の「旅にしあれば椎の葉に盛る」を面影としてをり、「笈日記」の「さまざまの事思ひ出す桜かな」は巻第八藤原広嗣の「この花の一枝のうちに百種の言を隠れるおほろかにすな」に想ひを託しての作であらう。

あるいは「皺箱物語」には巻第九高橋虫麿の「水江の浦島が子が堅魚つり」に着想を得た「あそび来ぬ鰈釣りかねて七里迄」があり、巻第十九の家持歌「多祜の浦の底さへにはふ藤波と挿頭して行かむ見ぬ人の為」を念頭に、「おくのほそ道」の「担籠の藤波は春ならずとも、初秋の哀れ訪ふべきものを」なる件を生れたのだらう。

面白いのは、六百番陳状の「かひや」を芭蕉も亦吟じて「おくのほそ道」に入れた。「這出でよかひやが下のひきの声」がこれで、巻第十と巻第十六の、上句はほとんど同じ「朝霞鹿火屋」のいづれかを先蹤としてゐるのだが、蛙を藁に変へたところに、芭蕉一流の誹諧の味が生れてゐるのも記憶しておくべきか。芭蕉のことだから多分、ぬかりなく六百番陳状にも目を通してゐただらうが、これに關しての確証は、無い。